

『じぶんの』

こころ』

「課長、三次会に行きましようよー」

「そうですよ、明日休みなんだし行きましようよ」

「え〜？まだ飲むのか？」

もう日付が変わったというのに、部下は相変わらず元気だ。若いというのは羨ましい。こちらは既に疲れている。次に行く気力はない。

「悪い、俺はここで帰るよ」

「え〜？何で〜？」

「ノリ悪い〜」

「行こうよ〜」

俺の体をバンバン叩く部下達。その力は結構強い。いつもならこんなことしないし、タメ口も言わない。うん、こいつら完全に出来上がっている。

「悪いな、行きたいのは山々なんだが、用事があるんだよ」

「用事？今からですか？」

「ああ、外せない用事だ」

「こんな遅い時間に？」

「そう、遅くないと駄目なんだ」

そう、今日は大事な用事がある。それは、今日でなくてはいけない訳ではないが、俺が今日、そうしなければ気が済まないからだ。

「わかった。奥さんと夜の営みの約束してるんでしょ〜？」

「ほほう、課長、まだまだ若いっすね〜」

「バ、バカ！変なこと言うんじゃない！」

俺が必死になっているのを見て、大笑いしている。完全にバカにされている。

「お前ら、来週たくさん仕事を押し付けてやるからな……」

「冗談っすよ、冗談。で、どんな用事なんです？」

一人の部下が俺に聞く。他の奴らも興味深そうに俺の発言を待っている。

まあ、こいつらの場合、さっきの答えを待っているようにしか聞こえないんだが。

「用事っていうのは……恩人に会いに行くんだ」

「恩人、ですか」

「うん、俺を助けてくれた恩人だ」

そう言っ、俺は空を見上げた。雲一つない空には、満月が輝いていた。年末も近づくこの季節は、空が澄んで見える。月が出ていなければ、きっとたくさんの星が見えただろうに。

「俺が、こうして生きていられる……命の恩人なんだ」

そんな俺の姿に、部下達は何も言っってこなかった。

「そういう訳だから、今回はパスさせてもらおうよ」

部下達に目線を戻すと、ヤバイと思っったのか不自然に慌てていた。

「そ、そうですか。わかりました」

「それなら仕方ないですよ、じゃ、じゃあ今度行きましようよ」

「ああ、悪いな……じゃ、行くから」

そう言っ、俺は片手を挙げて歩き出す。数歩歩いてから、振り向くことなく俺は呼び掛けた。

「お前らー、三次会とか言っってそのまま愛を育んだりするなよー」

後ろからは、部下達の笑い声が聞こえてきた。

——そこは、何も変わっっていないかった。俺が学生の時の景色と、何も変わっっていない。

暗い公園から見下ろす町の風景。深夜ということもあり、家々の明かりはほとんど消えているが、街頭や店の明かりは点々と輝いている。

本当に、何も変わっていない。ここにあるもので、変わったのは俺だけ。そう考えると、まるでタイムスリップでもしたような感覚になる。不思議だ。実際は時間が動いているのに、ここは時間が止まっているように思える。

「……寒いな」

そんなに強くない風が、体の体温を奪っていく。コートを着てマフラーもしているのに、体が芯から冷えてしまうような寒さ。冬は苦手だなと改めて実感する。

俺はポケットからタバコを取り出し、火を付けた。先に赤い光が付いたことを確認すると、軽く煙を吸った。

「……来てくれるかな」

煙をはきながら呟いた。俺の恩人が来てくれるか不安だったから。

なぜなら、俺が来てくれると思っただけだから。実際、約束もしていない。連絡先も知らない、赤の他人とも言える人物を、俺は待っているのだ。夜も遅い。連絡を取っていないという時点で、もう寝ていてもおかしくない時間帯。端から見れば、変な人と思われても当然だ。

それでも、俺は待つ。来てくれることを信じて。

俺はもう一度タバコの煙を吸う。

この時間、天気、空気、世界。全てがあの時と同じ。

君と出会った、あの日と——

目***

——何も、残すものはない。全て、処理してきた。

自分なりに解決し、終わらせてきた。

もう、何もない。大丈夫だ。

心を無にして——行くことができる。

俺は、そう心に刻み込んでここにやってきた。

ここから見える景色は、嫌いじゃない。

決して綺麗でもないし、だからと言って何も見栄えがあるのでもない。そこには、ただ町の風景が広がっているに過ぎない。

しかし、その景色も夜遅くとなると暗闇に支配され、かすかに見える程度にしかない。

それは、何も無い無の世界にも見える。混沌だけが、この世界にあるような。

空には、大きな満月が世界を照らしているが、それは届いてないようだ。

僕はその世界に、たった一人だけ存在しているのだ。

誰も居ない、何も無い、この場所に、一人だけ。

それは、今の俺にとって都合の良いこともある。

何かが居ると、それは簡単に出来なくなってしまうからだ。

出来る限り——一人がいい——

……あと、一步だ。

あと一步踏み出せば、俺は変わる。軽く弾むだけでもいいんだ。少しずれるだけでもいい。

そうすれば、今の俺ではなくなるのだ。

それは俺の望むことであって、皆が望むこともあるのだ。

そう——俺が俺でなくなること、世界は変わるのだ。

お互いの利害が一致する、最善策の行動。

これが、一番すんなりと事が進む方法。

そう、これでいいんだ——

だから……

せめて、この景色だけは、焼きつけておこう。

「……月が、綺麗だね」

誰かが、俺に話しかけている。いつの間居たのだろうか。

俺は、特別驚くことはなかった。いや、驚かなかったのではない。そういうことをするのを、止めようとしていたんだ。

もう、いらぬから。

「月が綺麗だね」

それは、再び話しかけてきた。声からして若い女性。しかもかなり近い。

下に広がる世界から視線を上げ、声のするほうへと顔を向けた。

そこには、少女がいた。俺の隣にいた。

少女と言っても、俺と同じくらいの年の女性。長い髪の毛を風になびかせ、空を見上げている。

「今日は、満月なんだね」

そう言っ、初めて俺に顔を向けた。俺に微笑むその少女は、あたかも俺を知っているかのようだった。

「君も、この月を見に来たの？」

「……まあ、そんなところ」

当たり障りのない返事をして置く。どうするにしても、この少女が居なくなることには、それが出来ないからだ。

「そっか……とても綺麗。今日は特に綺麗だね」

再び空を見上げる少女。それに続くように、俺も空を見上げて満月を眺めてみる。

「……俺には、よく分からないな」

率直な気持ちで答えた。いつもと何も変わらなく見えるし、天文学に興味がある訳でもない。何がどう違うのか、少なくとも俺の頭では理解できない。

「そう？輝き方が違うじゃん」

「輝き方って……何が違うんだよ」

「見れば分かる」

とりあえず見てみる。しかし、やっぱりわからない。

って、俺は何をしているんだ。こんなことをしている暇は無い。

「君は、今の自分をどう思っているの？」

「えっ？」

不意なその問いかけに、思わず少女の顔を見る。

いきなりにしても、その質問はおかしいだろ。

「君は、一体何を悩んでいるの？」

「な、何を言っているの？」

「君は、ここで何をしようとしているの？」

「何って……月を……」

「君は今……死のうとしているの？」

その言葉に、俺は絶句した。少女は、見上げていた顔を俺に向けると、こんどは少し淋しそうな表情を見せていた。

この少女は、わかっているというのか。俺が、ここでどうしようとしていたのか。

自殺しようとしていることを、知っているのか。

しかし、どうしてだ。俺は誰にも言っていない。それを気付かれるような態度も、普段見せていない。今日だって、何事も無い一日を過ごしているかのように振舞っていた。

そもそも——決断したのは、今日なのだ。

それに、ここはそんな怪しい場所でもない。この場所は、近辺では景色が良いということで、恋人達が夜、よくここに來ることもある公園。待ち合わせに使われることもあるような、普通の公園。何も

しいことはない。

それなのに、少女は知っている。初対面で、話したこともない少女が、俺が知っている。そして何より——俺が悩み、どうするというのをあたかも聞いたように話してくるのだ。

「君は、死のうとしているの?」

再び質問する少女。俺は、目線を反らす。

そして、答える。

「……ああ、そうだ」

答える義務はない。しかし、この少女には嘘を言ってもバレバレな気がしたから、いっそ本当のことを言っておく。驚かせてやろうと思った。

しかし、少女の反応は何も変わらなかった。

「そっか」

そっけない返事。ならば、どうしてしつこく聞いてきたんだと軽く頭にきた。

こちらは、真剣にそうしようと思っっているのだ。

「君がそうしたいなら、すればいいよ。私は止めない」

普通じゃない。今から自殺しようとしている俺が言うのも変だが、この少女は俺が死ぬことを認めているのだ。常人であれば、それを止めるために必死に説得するものだが。

「君が決めたなら、そうすればいい」

「……止めないのか?」

思わず、俺は質問した。止めてほしくはなかったが、あまりにも不思議な対応だったので、変に気になった。

その問いかけに対し、少女は驚いた表情を俺に見せる。

「止めないのって……どうして?」

「どうして……普通、止めるだろ?」

「そう?だって、その人の人生だもん、その人が決めたことの他人が変に干渉する必要はないじゃん」
胸を張って答える。やっぱり、この少女は何かが変わっている。

「でも……」

「ん?」

何か言いかけて、口ごもった。何か言いたいこともあるのか。

「でも……何だ?」

「君は……そうやって逃げるの?」

「逃げる?」

「うん……君は、今からすることを正当化させることで、自分の行いを美化させ、かつ自分の苦心を解放させたいと思っっているんでしょ?」

この少女は、心を読むことが出来るのだろうか。ある意味、恐怖を覚えた。

心の中を、覗かれているようだった。俺の考え、思い、感情。何もかも見えているのではないか。そう思えた。

「……君は、何者なの?」

「私?私は普通の女の子だよ?」

「本当かよ」

「本当だよ。どこにいてもいるような女の子だよ」

嘘つけ、どこか山奥で修業でもして読心術でも身に付けたんじゃないのか?

「私が、君の心を読んだから、それでそんなこと言っっているの?」

それだ、それを言いたい。だから普通じゃないんだよ。

「まあ、そんなことはどうでもいいの」

「良くねえよ!」

俺の心の中にモヤモヤが出来ちまったじやねえか。

しかし、俺の言葉を無視して、少女は話す。

「君は、自分の気持ちを言ったことある？」
「……」

「ここまで来ると、もう隠す必要もないな。いっそ、思っていることを言うだけ言ってやろう。
それから……飛び降りてもいいか。」

「そんなこと……言わなくても分かる」

「なんで？」

「態度で分かるから」

「態度？」

「そう。普段日常での相手の行動を見れば、すぐにわかる。俺を必要としていない……まして、居なくてもいいって」

「……」

「そうさ、俺は居ても居なくても、どうでもいい。必要とされていない、存在価値のない人間。」

「それだけで、死ぬの？」

「まさか。態度だけじゃなく、行動でもある。みんな、俺を避けて行動している。話していても、変に空気がおかしくなる。俺が居ないところでは、そんなことない。俺がいることで、他人の機嫌を損ねるんだ」

「話をしているにも、どこかぎこちない。俺と一緒にいることが少ない。俺がいないところだと、とても楽しそうに、幸せそうになっている。」

「それは……俺のいないところだからなんだ。」

「だから俺は……居なくなる。」

「つまり……君の存在は、回りに害を及ぼしている」と

「そうだ。俺が居ること、必要のないことを起こしている」

「なんで？」

「なんでって……」

「なんで、そうなるの？」

「それは、純粹な問いかけだったんだろう。とても険しい表情で質問してきたから。」

「話聞いていたか？言ったとおりで」

「分からない」

「分からないって……」

「分からないよ。どうして、それだけで自分が存在する意味がないってことになるの？」

「そんなの簡単じゃないか。さっきも言ったように、態度、行動、会話。聞かなくても分かることだ」

「聞いてないで、よく分かるね」

「こいつは、俺にケンカを売っているのだろうか。ああ言えばこう言うで、人の考えを理解しようという素ぶりもない。」

「君の考えていることが、みんなの考えていることと同じだって、どうして分かるの？」

「……何が言いたい」

「君の被害妄想じゃないの？ 君が悲観的になっているから、ありもしないような……」

「お前に何が分かる！」

俺は大声を上げ、少女の言葉をかき消す。

「俺がどんな気持ちで生活を送っているかと思っているんだ！ 学校では、あまり会話もせず常に一人である。クラスメイトと話してもぎこちない。俺と何か距離を置いている。遊ぼうという声さえ掛からない。家に帰っても、親は仕事が忙しいと言っついても居ない。最近はろくに会話してない。どこに行っても、俺は孤独だ……誰も相手をしてくれない。誰も……俺を必要としない。だから、俺は誰とも関わらなくなった。話もしない、交流もしない、何もしない。空気のような状況にいるようにした。そして、思った。俺が居なくても、みんなは何も困らない。居ても、意味がない。だから消えるんだよ。そうすることで、俺もみんなも救われるんだから……」

「……」

「それなのにお前は、分からない分からないって……今日会ってお互い何も知らない人間に俺の何がわかるって言うんだよ！」

「何もわからない」

「な……」

この時、俺は初めて人間に対して怒りを覚えた。こんなに言っても……こんなに思いを吐き出しても……こいつは、何も変わらない。さつきと同じ態度のまま。

こいつも、みんなと同じなのだ。分かってくれない、分かってほしい。俺が一体どんな思いで……どんな気持ちで今まで生きていたか。

殴ってやろうかと思った。今の俺なら、老若男女関係なしに思いっきり顔を殴ることが出来ただろう。

「やっぱり、分からないよ。根本的に。私には、さ」

「て……てめえ！」

俺は震える拳を振り上げた。どうなってもいい。こいつを泣かせようと傷つけようと、どうでもいい。この場から消え失せてほしい。

そして、すぐに消えたい。そんな衝動に駆られた。

「でも……少しは分かったかな」

「えっ？」

その言葉を聞いて、俺は少しだけ冷静さを取り戻す。振り上げた拳をゆっくりと降ろし、少女に聞いた。

「分かったって……何がだよ」

「君の気持ち、ちょっとだけ分かった」

「俺の気持ちの、何が分かったんだよ」

「それは……」

少女は夜空を見上げ、数秒の沈黙後、

「君の悩み」

そう、言った。

俺の悩みが分かったって……それは、もう前から言っていたじゃないか……

「うん……そうか……なるほどね。うん、君の悪いところが見つかったよ」

「……何だよ」

「君は、現実生きていない。自分の世界に生きている」

少女は、はっきりとそう言った。

俺は、その言葉を理解することが出来なかった。

「君はね、自分の作り上げた物語の主人公になっている。悲劇の主人公という設定のね。自分は拒絶されている、存在理由がない、そんな猜疑な考えばかり抱いている。君の思う環境が、どうしてもそう考えざるを得ない状況だから。それは、私でもそう考えてしまうと思うよ」

「……」

「でもね、君は一つだけ間違っている。君は、その気持ちをわかってくれないことに絶望している。その原因は、何故だと思う？」

「何で？」

「それは、伝えていないから」

「伝えて、ない？」

「そう。君は最初、自分の出来事ばかりを話していたよね。自分の本当の思いを伝えることなく、ただ自分の経験談を語るだけ。辛くて、苦しい体験だけ。でも、それはあくまで他人の心という括りで、良くて個人価値観の見方で終わってしまう。君は、知ってほしいけど、それを言えずにいる。それを、自分のワガママだと思って。だから、遠まわしに伝えようとしている。でも伝わらない。こんなに、伝えているつもりなのに、伝わらない。その齟齬に絶望して、自分から『自分の世界』という殻に閉じこもってしまったんだよ。だけど、それは返って乖離を生んでしまった。そして、また殻の中に深

く入り込んでしまった。君はそのスパイラルに陥ってしまい、死という極論まで行きついてしまったんだよ」

少女の言っていること……それは、俺の本心を捕らえていた。

そう、はじめから分かっていた。俺が、いけないってことぐらい。

少女の言うように、俺は気持ちを言葉にして伝えたことがない。態度で示していた。怖くて、言えなかったんだ。

俺は、何もしていない。俺の知らないうちに、みんなが俺から離れていった。確信はない。でも、どうしてもそう思うことしか出来なかった。

認めたくなかった。自分が、嫌われているということ。

そう思いたくなかったから、俺は言葉には出さず、接し方を変えた。

そうじゃないと、みんなに行動してほしくて。いつもと違う俺を見て、何か気付いてほしくて、そうした。

でも、違った。

そうすることで、返って離れていった。

それを見て、俺はさらに変わった。

それが、どんどん深みにはまっていき、取り返しのつかない状況にまでなった。

それが耐えられなくなったんだ。

「人間は、君が思っているように賢くない。見ただけじゃ分からない。だからこそ、人間には言葉というものがあるんだ」

「言葉……」

「そう。自分をありのまま表現出来る言葉。他の生物にはない、特別な能力。それを駆使しないでどうするの？ そうでしょ？ 言い方が悪くなるけど、君は人間として接してなかった。生き物として、いたんだよ、きつと」

「……そう、なのかな」

自分を、伝える、言葉。そんなこと、今まで一度も言ったことがないかもしれない。

常に、当たり障りのないように行動してきた俺は、自分の意見を述べたことが無かった。

それは、その人達の機嫌を損ねる気がしたから。

俺がそうしないことで、変わらないで、平和にいられると思っていたから。

だから、俺は自分という人間を殺し、生きてきた。

それが、一番いいと思ったから。

でも……みんなは自分を、出しているんだよな。

今回はそれが影響して、こんなことになったのだとしたら。

俺も、自分を出してもいいのかな……

そう、思っているのかな……

「……なあ」

「ん？」

「認めたくないけど……君の言う通りかもしれない」

「……そう」

「俺は……俺で居ていいのかな」

怖かった。本当の自分を出すことが。ただ、それに恐れているんじゃない。

それを、拒絶された時が一番怖い。そうなれば、俺という人間を認めないことになる。つまり、自分は社会から認められないことになる。

たかが家庭、学校、住んでいる町という小さな社会に、何を怯えているのだと、普通は思うだろう。大袈裟に考えているように聞こえるだろう。

でも、俺にとってはそれですら怖いのだ。孤独というものを経験してしまっただけから、この思いは強くなる一方だった。

でも、許されるならば——ありのままの自分を出したい。

俺は、少女が言葉を返すのを、待った。

しかし、それはすぐに返ってきた。少女は、俺の肩を優しく叩くと、満面の笑顔を浮かべてこう言った。

「いいに決まっているじゃない。君は、君でしかないんだから」

この言葉が本位であったのか、それとも俺を傷付けないためだったのかは知らない。少女が何を思っ
て、こんな僻むことしか出来ない器の小さい人間に励ましの言葉を掛けているのかは知らない。

しかし、どうであつても、その言葉が嬉しかった。そう言ってくれたのは。少女だけだったから。

「君の人生は、君だけのもの。自分がしたいように生きないと勿体ないよ」

「そうだよな……そう、だよな」

最初は少女に、最後は自分に言い聞かせるように言った。

でも、やっぱり……それを抑制してしまう自分が居る。

言うのはいつでも出来る。しかし、行動出来ない自分。

「ご都合主義で生きてきたばかりの、しつぺ返しがここに現れるとは、男として情けないな。」

「……そうだ」

少女はおもむろにポケットに手を入れ、何かを差し出した。

「あげる」

それは御守りだった。どこの神社にでも売っているような、小さな御守り。

少女は、それを俺の上着のポケットの中に入れた。

「それがあれば、きつと上手くいくよ」

「上手くいくって……ゲン担ぎしろと?」

「まあ、そんなところ」

投げやりな言葉を言うと、少女はゆっくりと立ち上がった。

「何もしないで終わらすより、どうせなら何かしてから終わらしたほうがいいじゃない。今、投げ出さないでもいいと思うけど。当たって砕けろ、だよ」

「当たって砕けろねえ……砕けないに越したことは無い気もするが……」

「細かいことは気にしない」

何も無しに、成果は得られない訳か。そうかもしれない。

もう、甘えるようなことは、辞めるべきなのだろう。

「私は知ったような口で助言しただけに過ぎない。最終的に、君の決断だから」

「俺の決断か……」

「そう。自分の納得できる答えを出して、それからだよ」

少女は歩き出す。足音で分かった。俺に言うことを言った、そういうことなんだと思う。

「そうしなければ……私みたいになっちゃうよ」

「えっ?」

少女の意味深な言葉に、振り向いた。

しかし、そこに少女はいなかった。ほんの一瞬だった。瞼を強くこすり、もう一度声のした場所を注視する。しかし、どこにも居ない。

いつの間にか現われて、いつの間にか消えた少女。現実では、ありえない。

俺はしばらく、その現実を飲み込むのに時間がかかった。

しばらくして、俺は思った。

「もしかして……俺は、夢でも見ていたのかも知れないな」

死の直前にいるようなものだったら、自分の欲望が、変な形に現れただけなのかもしれない。でなければ、あんな不思議な事が起こる訳もない。

それに、少女の言っていたこと……俺の思う気持ちを理解し、かつ俺がそうしたい思いまで分かっていた。よく考えてみれば、これもおかしいことだった。

そう、あれは夢だったんだ。何だか笑えてきた。死のうと思っっている人間が、直前になって自分で自分を励ますようなことをしているのだ。滑稽な話だ。

「……ん？」

ふと手に何かがあった。ポケットの中に、何かが入っていた。まさかと手を突っ込む。そして思うのだった。

夢じゃ……無かった……？

俺は、再び少女が歩いて行ったであろう場所を振り向いた。

そこには……人がいた。

それは、少女ではない違うものが現れた。

それも、一人でなく数人。

一人は息を切らし、一人は涙ぐみ、一人は何か呼びかけているようだった。

だが俺には、その声は聞こえなかった。俺は違う人間に、心で聞いていたからだ。

ねえ……君が言うことが本当ならば……

俺は……俺として、生きていても……いいのかな……

目**

「……今思えば、変なことだったよな」

タバコの火を消しながら、思う。いろいろ思い出してみると、不思議よりも、あれは変という言葉が合っているように思える。

でも、そんな変なことが、俺を生かしているのだ。

「ふわあく。さすがに眠くなってきたな」

眠気覚ましの意味合いも兼ね、すぐに新しいタバコを取り出して火を付ける。そしてすぐに腕時計を見る。暗くてよく見えなかったため、仕方なく携帯を取り出して時間を確認する。

午前二時を過ぎた。いわゆる丑三つ時。日本古来の考え方では、一番アレが出る時間帯。俺はこの時間を見計らって来た。

俺の予想が間違っていないければ、この時間に来るはず。

そして、アレはやってきた——

「タバコ吸ってるんだ」

その声は、変わっていないかった。確かに、それは昔のままだった。

「ああ、俺も大人になったから」

すぐに振り向くことはせず、タバコを吸った。正直、会ってみると恥ずかしい。

「体に悪いものを自ら取り込むなんて、理解に苦しむよ」

「社会はストレスの塊だからな。自分のしたいことをして共存を図るのが重要になるのさ。俺には、タバコがそれに当たるんだよ」

そう言っ、声のするほうへ体を向ける。

二十年ぶりの、再会だ。思った通り、何も変わっていない。

改めて思った。本当にここは、何も変わっていないんだなって——

「おっす」

少女は、軽く手を挙げて俺に挨拶する。俺も同じように手を挙げた。

「随分とダンディになったね」

「年取っただけだ。ダンディなんて言葉は俺に合わない」

「もう……自分に自信持ちなさいよ」

「こちらは謙遜しているんだよ……しかし……」

タバコを口に啜えて、少女の体を舐めまわすように眺めてみる。少女は、そんな俺の行動を見て、恥

ずかしそうに体をおもむろに手で隠す。

「な、何？いやらしいことするつもり？」

「馬鹿野郎、幽霊に発情するようなバカな性癖はない」

「失礼な！どんな立場であつても、私は女の子なんだからね！」

頬を膨らませて怒る少女。そんな姿に、苦笑いするしか出来なかった。

幽霊——それが少女の正体だ。

あの日——少女との体験が、本当だったと驚いた時にやってきた人々は、俺を探していたクラスメイトだった。俺が帰っていないことを知った家族が、先生やクラスメイトに連絡し、総動員で探し回っていたらしい。

やって来た早々、みんなから質問攻めにあつた。こんなことして何になる、悩みがあるなら言え、誰に何をされたなど。

どうしてそんなことを聞くのかとわざと聞いてみると、俺がここにいるのを見て俺が自殺しようとしていると思つたらしい。

みんな、俺を心配してくれていたのだ。心配じゃなければ、俺を探すようなことはしないだろう。そう思うと、俺は今まで自分のしてきたことを恥じた。

俺が拒絶されているんじゃない、俺が拒絶していたと。

申し訳なくて、居られなくなった。

その後、こつ酷く親に怒鳴られるは先生に一日中説教を受けるわ、散々な目にあつた。

だけど俺は、気付くことが出来た。

それだけでも、俺は変わった。

何故なら、少女に出会えたからだ。

「顔、髪型、声、服装から何から二十年前と同じだもんな。幽霊つてのは変わらないんだな。ふむ、勉強になった」

「完全に馬鹿にしてるでしょ」

少女の顔が険しい。そろそろ止めておこう。これ以上怒らせたらマジで呪い殺されるかもしれない。

「まあ、冗談は置いて……」

俺は、スーツのポケットに手を入れると、少女から渡された御守りを取り出した。

「持ってたんだ」

「ああ。あの日もらつてから、大事にさせてもらっている」

「……何か気持ち悪い」

「おい、その言い方は無いだろう」

俺のツツコミに、少女はクスクス笑う。まったく、自分で渡しておいて意味の分からないことを言いやがって。

「つてことは、君は生きてたんだ」

「そうさ。君のおかげでね。順風満帆な人生を歩んでおります」

「それは何より」

そう言う少女に、軽く会釈をした。

「でも……君はどうして、俺を助けようとしてくれたんだ？」

少女からすれば、愚問と言える質問だろう。だが、俺はあえて、聞いた。

「そんなの決まってるじゃない……私みたいになつてほしくないからだよ」

「……だよな」

少女は、幽霊だ。

俺が二十年前に会つたとき、既に幽霊だった。

俺が居たあの場所で、少女は飛び降り自殺をしていた。

少女のことを知つたのは、あの日から二日後のことだった。ニュースで少女の自殺のことを報道して

いた。彼女は、俺と出会った三日前に死んでいたのだ。後に、遺言が見つかった。そこに書かれていたのは――

『私、居ても何も価値がないから、居なくなります。さようなら』
原因は――俺の思いと同じだったのだ。

いじめではないかと調べが始まったが……それは違った。彼女の、一方的な被害妄想だった。

彼女を嫌っている人はいなく、誰もが普通に接していた。むしろ、彼女の方がみんなと距離を置いていたなど――俺の行動と全く同じことをしていたらしい。

だから、俺の気持ちが分かったのだ――

「それが私と同じような状況だった君だから、なおさらだよ」

「そうだよな。全く同じようなこと考えたあげく、全く同じ死に方しようとしていたんだからな。まったく、怖いよ」

皮肉なものだ。少女が死んでいなければ、俺は死んでいただろう。死んでいた少女に生かされたのだ。

人生は、何が起るのかわからないな。

「ねえ……聞いてもいいかな」

「何だ？」

「君は今……生きることをどう思う？」

「生きることねえ……」

自ら人生を終わらせてしまった少女の、純粹な質問だった。

俺は正直に答える。

「辛い」

「辛い？」

「ああ、辛い。社会的立場、仕事、人間関係、生活。学生時代の時よりも何十倍も辛いよ」

「……」

「でも……」

俺はタバコの煙を消してから、言った。

「辛くても……楽しいこと、幸せなこともある。生きているのは素晴らしいな」

その言葉を聞いて、少女は満面の笑顔を浮かべた。

それは、とても幸せそうで嬉しそうだった。

「そう、よかった――」

少女の目には、微かだが涙が浮かんでいた。

数十分程経っただろうか。俺の考えが正しければ、もうそろそろ時間になってしまう。その前に聞いておきたいこと――そして、伝えたいことがあった。

「なあ……」

「何？」

「君は、ずっとここに居るのか？」

呪縛壺と思われる少女はこうして、永遠にここに残ってしまうのか。

「さあ、分からない」

「なら、また来ても会えるのかな」

「さあ、分からない」

「……そうか」

詮索するつもりもないし、正直言うと、もうここに来るつもりもなかった。

たぶん少女も、来てほしくはないと思う。だから、素っ気ない返事なのだろう。今日来たのは、伝えたいことがメイン。二十年間思っていたことを伝えなかった。

俺は、空を見上げる。少女も、それに続くように空を見上げた。

「月……綺麗だな」

「……うん、綺麗だね」

空には、あの日と同じように、綺麗な満月が輝いている。

「……あのさ」

「ん？」

「……ありがとう。君に出会えて、良かった」

一瞬の沈黙後、

「どういたしまして」

その言葉の後、少し強めの風が吹いた。

しばらくしてから、視線を少女の居た場所へと移す。

そこには、少女の姿はなかった。

俺は新しいタバコに火を付けた。大きく息を吸い込み、吐き出す。白い煙がもくもくと立ち込め、消えていく。

「本当に……ありがとうな」

そう呟いて、俺はもう一度タバコを吸った。

小鳥遊涼

『じぶんの、こころ』

二〇一一年一月三日発行

赤身レコーズ 〇八四